

黄 晔芬著

## 『中国古代葬制の伝統と変革』

宇野隆夫

本書は、中国新石器時代から秦漢代に至る中国葬制の総合的な研究である。その内容は墓の年代的变化や地域的特色を多角的に解明する一方、絵画・文字資料も加えて宗教思想の復元にまで取り組んだものである。この作業を通じて、秦漢代に至って中国葬制の長い伝統に大きな変革が加えられたことを浮かび上がらせている。

本書の内容は考古学にとどまらず、多くの分野の研究者に大きな刺激を与えるものと考えられるため、ここに紹介して若干の意見を述べることとしたい。まず本書の構成を示す。

序

### 第一章 漢墓と漢墓研究

第一節 漢墓研究の意義と課題

第二節 漢墓の研究史

第三節 用語と概念

第四節 埋葬施設の構造と型式

### 第二章 墓制の伝統と地域的様相

第一節 槨墓の形成と確立

第二節 中原および東方・北方地域の槨墓

第三節 秦墓

第四節 江南地域と土墩墓

第五節 楚墓

### 第三章 漢墓の変容 郭から室へ

第一節 前漢期大型墓

第二節 室墓成立の三段階

第三節 中軸線配置型室墓の成立

### 第四章 漢墓の定着と波及 地域色の検討

第一節 前漢期中小型墓

第二節 中小型室墓の形成と地域性

第三節 墓制と環境

### 第五章 穹窿頂玄室への展開 「天地合一」の模式

第一節 各地域の後漢墓

第二節 後漢墓の規模と型式

第三節 漢墓における天井部形態の変化

### 第六章 墳丘施設の基礎的研究

第一節 研究の現状

第二節 墳丘の築造と分類

第三節 方墳から円墳へ

第四節 中国における墳丘施設の特徴

### 第七章 副葬品から見た埋葬施設の空間利用

第一節 副葬品の種類

第二節 槨墓の様相

## 第三節 室墓の様相

## 第四節 倉・竈・井戸・厠の副葬の意味

## 第八章 絵画・文字資料から見た他界観の変容

## 第一節 墓内装飾の絵画題材

## 第二節 墓出土の文字資料

## 第三節 装飾墓の性格

## 第九章 宗廟祭祀から墳墓祭祀へ

## 第一節 靈魂不死と魂魄思想

## 第二節 宗廟祭祀の伝統

## 第三節 墳墓祭祀の成立と昇仙への祈願

## 終章 漢墓の歴史的意義

## 二

次に内容について紹介したい。

第一章は、漢墓の研究史を整理して、課題と構想を明らかにしたものである。特に膨大な調査成果を総合的に理解する上で、基本的な用語・概念の明確化と体系化を重視した。

この立場から著者は、棺（遺体を直接に納める容器）・槨（棺を覆い密閉する構築物）・室（棺・槨を納める住まい、外界に通）の大分類を提示した上で、埋葬施設の細かな型式分類を行った。また墓を作つたり遺体・副葬品を搬入するための墓道と、室に付属する羨道を区別したことも重要である。

その型式の細別が詳細・複雑であるにも関わらず理解しやすいのは、型式の大別が体系的で明確であるからである。本書はこれらの型式変化に含まれる意味を、以下の各章で解き明かしていく

という構成をとる。

第二章は、新石器時代以来の漢墓の形成過程と地域的な特色を述べたものである。

まず棺と槨状施設について新石器時代後半に出現したが、漢代以前の墓制を代表する底板を備えた箱型の槨墓は山東省淄博市西朱封M1（龍山文化期）などにおいて特別な身分の人の墓として確立したという。商・西周期にはこれが普及し、春秋戦国期には版築墳丘・墓上建築が加わると同時に、地域色が明確になるとされる。

地域色については中原・東方・北方の槨墓、秦墓、楚墓、江南の土墩墓、について示される。その詳細は本書を参照されたいが、従来は室墓の源流と目されることが多かった秦の地下式土洞墓を槨墓の一種と評価し、始皇帝陵もその可能性が高いと評価した。また楚墓も槨墓であるが、複雑な間仕切りが発達する一方、棺や仕切板に方孔を開け模造門扉に発達したことを重視した。それは埋葬者の靈魂が槨内を自由に移動するためのものであり、室墓の成立の出発点になるとされる。

第三章は大型墓について、中国墓制の大転換である漢代における槨墓から室墓への変化の過程を明らかにしたものである。

まず漢代の大型墓の型式として、楚の伝統をひく間仕切り型槨墓、前漢前期には出現した槨護型槨墓（槨の周囲に材木を小口積みする）、前漢前期に出現して型式変化する回廊型室墓（墓道に向かつて開く玄門と羨道の出現）、前漢前期に崖墓として始まり後漢期に主流となる中軸線配置型室墓（主軸に沿って諸施設を対象に配置する）、回廊型室墓を省略した単玄室型室墓の大別が示

された。

この型式分類に基づいて室墓成立の三段階が提示される。第一段階は柳護型柳墓における模造門扉の墓道に向かった位置への固定と大型化、第二段階は回廊型棺室中式室墓における羨道を通じての外界との開通と玄室の邸宅建築化、第三段階は回廊型棺室後位式室墓と中軸線配置型室墓における祭祀空間（前堂）の分離と天井構造の発達である。それは地下世界に邸宅建築・祭祀空間を持ち込むものであり、さらに漢代大型墓の立地は山と河にそることが多く風水思想に基づいて占地したことが後述される。

第四章は中小型墓について、大型墓と同様の分析を行ったものである。

中国を八地域に別けた分析の結果、大型墓とは異なつて地域的な差異が顕著であることが明らかにされた。すなわち長江中流域のように室墓化第一段階が明確に存在するが以後の段階の進捗が遅い地域と、河南・長安周辺地域のように同第一段階が明瞭ではないが第二段階以後の室墓化が顕著な地域が対極をなし、その中間的な在り方も含めて多様な地域差が存在した。また森林資源の多寡に応じて建材にも違いが生じた。そして中小型墓の室墓への移行が前漢中期以後とやや遅れることから、大型墓の影響によって中小型墓の室墓化が進行したと評価される。

第五章は、後漢墓の動向を検討したものである。

地域・時期別の整理の結果、建材の地域的特色が若干は残存するが、基本的に磚石造が主流となり室墓化が達成されるとする。そして埋葬施設内の祭祀空間・甬道が発達して陵園寢殿建築・石造墓前祠堂などの墳墓祭祀が定着し、辺境地域にまで及ぶ墓制の

共通性が強まった。これは後漢帝国が各地に強い影響力をもった結果と評価した。

他方、後漢中期までの数少ない回廊型室墓は依然として王侯の墓であったが、後漢墓全体を通じて各型式の主室の規模の格差が少なくなり、室数が差異を示すようになったという。後漢期には、中央と地方あるいは権力者と一般貴族の埋葬施設に関する序列の規制が緩み、地方豪族も大規模な玄室を築く方向にあった。

また漢墓の重要な特徴である天井部の発達（平頂、屋根形頂、拱頂、アーチ頂、穹隆頂）について考察される。その変化は河南地域を中心として進行し、前漢後期に出現して後漢期に広まった穹隆頂が到達点である。穹隆頂の中心には円や蓮華文を描くことが多く、室墓は天体宇宙あるいは仙界と意識されたと評価される。第六章は、従来あまり詳しく追究されていなかった墳丘を考察したものである。

まず墳丘出現の諸説を検討して、築造法を整理した。次いで墳丘型式を墳墓一体型（土墩墓）、地下の埋葬施設の上に版築の方・円丘を築く墳墓分離型、山を墳丘とする山陵型に大別して、その推移を復元した。

そして商周期は江南地域の土墩墓を除いて基本的に墳丘を築くことはなかったのに対して、春秋前期以後に墳墓分離型の方墳・長方形墳が増加し、戦国期には方形壇をもつ方墳が主流となる過程を示した。また趙の地域ほかで段築成が始まり、秦の地域では大型墓や複数の墓を囲む囲塚が発達したという。秦・前漢前期には、三段築成の方墳・陵園・寢殿建築など大規模な皇帝陵が出現したが、前漢中期以後には方形壇や段築は衰退傾向となり、王侯

墓や中小型墓も版築方墳が主流をなした。これに対して、後漢期の大型墓・中小型墓は円墳・方壇円墳が増加するという大きな変化が生じたことが指摘される。

この中でも墳墓分離型の版築墳丘が出現・発展した背景について、それが春秋期の中原の周辺地域で先行して出現し、戦国期には諸侯・列強がこれを競って築いたことから、墳墓祭祀との関わりは薄く、新興の権力者の現世的な力の誇示と評価した。また前漢中期以後における頂部付近の三段築成は崑崙山をイメージしたものであるという。後漢期に墳丘が方形から円形に変化する理由としては、墳丘が宇宙観を表すようになったものであり穹窿頂玄室の定着と一連の現象と位置づけた。

第七章は、副葬品の内容と配置から埋葬施設の空間利用を復元したものである。祭祀や他界観を復元する上で重要な考察である。副葬品として、礼樂器（酒器・食器・水器・樂器など被葬者の生前の地位を誇示する器物）、生活実用品（飲食器・家具調度・衣装寝具・装身具・文房具など被葬者の生前の愛用品）、威信財（車馬具・武器・武具など被葬者が生前に威信を得た器物）、鎮墓辟邪品（鎮墓獸・鎮墓偶人・買地券・朱書魂瓶など地下の死者を守護し、死者の災厄から現世を守る器物）、供獻祭祀品（鼎・俎・高杯・耳杯・几案など食物を供獻する器物）、明器（倉・竈・井戸・厠ほか多種のミニチュア製品）の六大陸が示されて、配置が分析される。

その考察は多岐にわたるが、主要な点のみを紹介する。槨墓においては、棺内の被葬者は装身具を身につけ、棺外の槨内に礼樂器・生活実用品・威信財などを種類別に配置することが

基本である。副葬品の質と量は被葬者の身分差や年代の推移に応じて変化がある。この中で戦国期の楚墓において、いち早く鎮墓辟邪品と供獻祭祀品が出現して漢代に影響を及ぼすことが重視される。そして漢代を含めて密閉型の槨墓では、地下の遺体と地上・天上とのつながりは志向されていなかったと評価した。

外界と開通する漢代の室墓では、副葬品の構成と配置が大きく変化したとされる。回廊型室墓においては、従来と同様の副葬品種類別配置を行うが、礼樂器の衰退が著しく玄門前面や前室における供獻祭祀が活発化した。また宗廟祭祀をつかさどる官職名を書く事例から、埋葬儀礼終了後も墳墓祭祀を継続する志向が生まれたと指摘される。

中軸線配置型室墓では、各部屋を車馬庫・食料庫・武器庫などとし、後室に生活実用品、前室に供獻祭祀品を置くなどの使い別けが明瞭である。後漢期には、供獻祭祀品と明器がさらに比率を高めて、供獻祭祀空間を一層整備するようになった。中小型墓の副葬品配置も、基本は大型墓と共通したという。

また被葬者の死後の生活に供されると考えられることが多かった明器についても、その意味をさらに追究した。中でも明器を代表して定型的な配置をとる倉・竈・井戸・厠が、五祀や陰陽思想と関わり、地下邸宅（陰宅）の風水の吉凶を整えるものとされた。第八章は、絵画・文字資料から他界観の推移を考察したものである。

まず中国では新石器時代前期から龍と虎の造形があり、死者の靈魂が乗龍昇天する不死の思想が存在して、以後の時代に影響を及ぼしたことが示される。

戦国期には槨墓の裝飾が盛んとなり、棺・槨や衣裳箱に描く漆絵や棺蓋や槨壁に飾る帛画から、他界観が考察される。その特色は、被葬者を写実的に描き、龍・龍舟や鳳の引導で昇天することであり、新石器時代の乘龍昇天思想の系譜を引くと評価された。

前漢前期の長沙馬王堆漢墓においては天地を複雑に描きわけけるようになるが、被葬者が儀式・饗宴を受けて天界に旅立つ場面を描き、伝統的な昇天図の完成と評価される。これに対して前漢中期になると、天上図に日月ほかに加えて蓬萊山などの仙山を靈魂の至る場所として描くようになり、昇天思想は昇仙思想に整備されたという。

室墓の壁画・画像磚・画像石などの多様な裝飾については、題材から昇仙図・瑞祥図・天像図・物語図に大別した。昇仙図・瑞祥図は死者の昇仙思想を、生前図と儒教思想に基づく物語図は現世社会を描き、玄室天井に描く日月星象などの天像図は玄室に天体穹窿を持ち込み天上と地下をつなぐとされる。

これらは槨墓の裝飾に似た昇仙・瑞祥図から始まるが、四神・仙山などが加わり、前漢後期には生前図・物語図が出現して天門ほかの題材が著しく増加した。天門・玉壁は、被葬者が神仙世界に入る入口であるという。

文字資料は戦国中期～前漢期の槨墓出土の卜筮祈禱文・遺冊類、後漢期の室墓出土の買地券・冥界文書などから魂魄思想や祖靈観の変化が考察される。戦国中期に祖靈は「父」を意識するようになり、子孫を加護したり崇ると考えられ、前漢期に天上の精魂と地下の鬼魂が結合した鬼神が出現したという。また地下冥界への関心が高まり、冥界の主に被葬者の情報を伝達する告地策が出現

して、後漢期の鎮墓瓶や買地券につながる。漢人の死後の願いは、靈魂が天に昇って仙人になることにあり、それが槨から室、羨道・玄門・祭祀空間の出現、天体を表象する穹窿頂の定着をもたらしたとされる。

第九章は、墳墓祭祀と宗廟祭祀を総合して考察したものである。中国では新石器時代（仰韶文化前期）以後、靈魂昇天の思想があり、新石器時代から戦国期に至るまで居住地と墓地が隣接する伝統が強いことから、死者に対する恐れは希薄であり、祖靈（祖先神）が重要な信仰の対象であったとした。そして殷代から戦国期に至るまで、祖靈を迎えて祭る宗廟祭祀が同族結合の要として重要であったとする。そして人の死は魂と魄（肉体）の分離であり、魂は天に昇って祖靈となり、魄は地下に帰って鬼魄になるとする考えが確立したが、戦国期の楚においては天から降りた魂が、生前の生活環境や墓にも出入りすると考えられたことが槨墓における模造門扉を生んだとされる。

このような評価から祖靈祭祀の場は定期的に祖靈を迎える宗廟であり、墓は鬼魄を地下に帰す一回限りの密閉装置であったとされる。宗廟の構造は前朝後寝と呼ばれる宮殿風の配置のものであり、朝は祖靈祭祀、寝は先祖の遺品を置く場である。

このような在り方が変化する端緒は戦国期の方壇方墳の築造や墓上建築・陵園の成立であるが、被葬者個人の記念的性格が強く宗廟祭祀に代わるものではないと評価される。そして墳墓祭祀の確立は、秦始皇帝陵の北側から発見された寝殿建築において、被葬者の個人靈を継続的に祭祀供献したことにであると評価した。これを端緒として、前漢皇帝陵の陵園建築は前朝後寝の宗廟型とな

る。これが墳墓祭祀と宗廟祭祀が一体となった陵寝制度の確立と評価されるものである。このような在り方は後漢期には、中小型墓にも及び、墓は、鬼魄の收容施設ではなく魂を含む鬼神の住いと認識され祭祀が実行されたとされる。その思想的な背景は儒教の「孝」にあると推定された。

終章では、本書を総括して槨墓から室墓に転換する漢墓の歴史の意義を提示した。

中国の伝統的な葬制である槨墓から室墓に転換する過程において、前半は長江中流域、後半は河南・長安地域が主導して、複雑な過程で広まる。後漢期のアーチ頂・穹窿頂の室墓の画一的広まりは統一帝国の復活を示し、後漢後期には地方豪族が諸侯王に匹敵するの規模の墓を営むようになった。

この室墓成立の思想的背景は、昇天した魂・祖霊を宗廟で祭り鬼魄を墓に密封する二元的なイデオロギーから、複合的陵墓施設において両者を統合する新しい葬送イデオロギーへの転換である。秦始皇帝陵の築造がその転機をなし、漢代には埋葬施設が外界に通じて昇仙思想が強まり、天体を象徴する穹窿頂が盛行した。その結果、墓は死者の葬送の場としてより、祖先・自己・子孫をつなぐ場としての機能を高めた。

中国墓制のモデルは、東アジア各地における墓制の展開を研究する土台となる。

### 三

以上、本書の多岐にわたる論考の一端を紹介した。それは長い時代・広い地域・膨大な数の資料を的確に分析して、明確な評価

を与えたものである。その成果は、読者の東アジア葬制に対する多くの視点に、刺激と指針を与えるであろう。最後にその主要な論点を再掲して若干の意見を述べたい。

本書の論考の基礎は、考古情報が多角的で緻密な研究によって、編年・地域差・階層差の枠組みを提示したことにある。中国葬制の体系的な研究として、楊寬『中国皇帝陵の起源と変遷』一九八一年が存在したが、本書の埋葬施設・墳丘施設・副葬品の幅広い考察は、従来の研究の水準を飛躍的に高めたものである。

この考察の結果、槨墓と室墓の大別の重要性が提示され、単純ではない室墓の形成・普及の過程が明らかにされた。そのプロセスにおいて戦国期秦墓より楚墓を重視し、秦始皇帝陵に至る秦墓を槨墓と位置づけたことは、従来の通説を大きく見直すものである。従来知られていた戦国期楚墓の物質的な豊かさの歴史的意義が明らかにされたと考える。

墳丘について、春秋・戦国期に出現・普及した方形版築を基調とする墳丘は新興の権力者の力を記念碑的に誇示したもの、前漢中期以後の段築構造が消滅して墳頂付近に三段築成を行う墳丘は崑崙山をイメージしたもの、後漢期の円形原理への変化は墳丘が宇宙観を表象した結果と提言された。墳丘出現の理由として楊寬氏は家屋を象つて墓壙・墳丘を営んだことや爵位に基づく身分制度が成立したことをあげていたが、前者の考えはほぼ否定されるであろう。ただ評者は新興の権力者の記念碑の出現が、新たな身分制度の形成と関わった可能性は少なくないと思う。今後、さらに検討されることを期待したい。

副葬品の考察も多岐にわたるが、食器(貯蔵具・調理具・煮炊

き具・飲食具」と一括しがちな資料を、空間的配置から礼樂器・生活実用品・供献祭祀品に大別したことは、評者などには極めて重要な成果である。その識別と盛衰の復元は室墓を評価する上で有効であったが、器物の象徴性や集落遺跡での研究にも大きく裨益すると思う。明器の倉・竈・井戸・厠などに宗教的意味があることを明らかにしたことも大きな成果である。

本書はこのような考古資料の分析にとどまらず、絵画・文字資料から生命観・他界観の復元を行っている。しかしそれを援用するだけではなく、上記の考古資料の分析に基づいた評価が、絵画・文字情報との相乗効果を高めていることが本書の特色である。なお埋葬資料から何を知り得るかについては世界的に議論がなされているが、プロセス考古学は現世の社会構造の反映を読み取ることを重視するのに対して、ポスト・プロセス考古学は死後観の復元が先決と考える。日本考古学には両者の研究が存在するが、プロセス考古学的な指向が強い。ポスト・プロセス考古学を評価する評者にとって、本書は貴重な成果である。

著者は魂魄(靈魂と肉体)からなる生命観、死後の魂の昇天と祖靈化・魄の地下での鬼魄化という觀念の中で、祖靈の宗廟祭祀、遺体の槨墓への密封がなされたと評価している。新石器時代後半から戦国期に至る長い時間の中での槨墓の推移や地域差を明らかにする一方で、このことを強調することが著者の大きな主張の一つである。

評者の本書に対する唯一の疑問は、著者が墓の地域差を他界観の違いではなく、森林資源ほかの環境的要因で説明することが多いことである。環境の違いは世界観・死後観の違いと関わること

が多い。中国において昇天思想が重要であることに異論はないが、長江流域や沿海地帯の舟・龜・鼈・魚などの絵画・造形からは、海の彼方の聖地観も存在したのではないかと思う。墓以外の宗教的器物も加えた各地の宗教観の復元を期待したい。

これに対して室墓が當まれる時代には、墳墓祭祀に宗廟の機能を集約して昇仙思想が整備され、魂と魄が再合体した鬼神の觀念も生まれたという。この中国葬制史上の大転換である陵寝制度の出現について楊寛氏は秦漢期に確立するものの戦国期あるいは商周期以来の發展形態と評価していたが、著者がその端緒を秦始皇帝陵とその陵園建築の造営に求めたことは重要な提言である。著者は始皇帝陵は依然として槨墓と評価しているので、統一国家の成立に伴う祭祀形態の变革が埋葬施設の变革に若干先行したと評価することになるであろう。これは今後さらに検証が必要などころと思うが、評者は宗教観の復元を社会構造の復元に連ねる端緒が得られたと評価している。

本書が論じた点はさらに詳細・多岐にわたるが、読者各位が本書に接して評価されたい。また中国は古くより東アジア諸地域と関わり、その関係性の解明は日本考古学にとっても重要な課題である。日本の古墳の埋葬施設も豎穴式(槨)から横穴式(室)へと中国に似た変化をたどったが、年代的なずれもあり中国思想との関わりに関する評価は確立していない。おそらく日・朝・中の考古情報の共通点・相違点を論じるだけでは、永久に水掛け論に終わるであろう。評者はそれを解決する一つの方法が、各地で本書におけるように総合的な考察から生命・他界観を復元して相互に比較することにあると考える。

本書は二一世紀の始まりを飾るにふさわしい、中国葬制史研究の好著である。著者は一九九〇年から六年間京都大学文学部大学院に在籍し、一九九七年に京都大学博士（文学）を授与されたが、本書はその成果を刊行したものである。本書は著者の資質と努力によってなったものであるが、そこに日本考古学がいささかなりとも裨益しているなら、評者らの大きな喜びとしたい。著者の今

後のさらなる研究の発展と日中学術交流での活躍を祈念しつつ、  
摺筆させて頂くこととする。

（B5版 三三八頁 口絵二五頁 索引二二頁 二〇〇〇年二月二十八日

勉誠出版 一七〇〇〇円）

（国際日本文化研究センター教授